

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02774

研究課題名(和文) 英語の事象修飾に見られる、形式と意味との対応関係とその規則性について

研究課題名(英文) The Correspondence between Form and Meaning and Its Regularities in Event Modification in English

研究代表者

金澤 俊吾 (Kanazawa, Shungo)

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：70341724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、英語の名詞句[Adj-N]の事象修飾に関して、形式と意味との対応関係における規則性を解明することにある。本研究では、(i)形容詞による実体を表す名詞との事象修飾の事例、(ii)a cup/glass of Nから成る事象修飾の事例、(iii)同族目的語構文、英語の話し言葉における、(iv)名詞句の構成要素に省略が見られる事例、(v)名詞句の反復が見られる事例を取り上げ、各事例の意味的特徴と談話的特徴を明らかにする。最終的に、当該名詞句の修飾関係は、いずれも人間の事態把握の仕方(類像性と、「図」と「地」の組み合わせ)と、各事例の頻度に基づき体系的に説明されることを明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語の形容詞、名詞から構成される名詞句によって表される事象修飾の現象に関して、コーパスの活用により、新たな事例を発掘し、実際の言語使用に基づく記述的説明を実現できている。また、一連の言語研究(語彙意味論、認知言語学、構文文法)と、コーパス言語学から得られる知見を融合した研究であり、各言語理論の進展にも寄与している。

さらに、本研究は、通時的考察により、現在見られる名詞句の事象修飾の多様性と経時的変化の説明を試みている。これは、新たな言語表現の創出とその形成過程を考察する手がかりとして、言語使用と、人間の事態の捉え方、および、言語使用をとりまく文化との接点を解明できる可能性が含まれている。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to consider the event modification in the English noun phrases composed of [Adj-N], clarifying the correspondence between form and meaning and its regularities. This study elaborates the semantic and discourse characteristics of some instances of the noun phrases involved in event modification: (i) the noun phrases where an adjective has a modification relation with a common noun; (ii) the noun phrases where an adjective modifies a cup/glass of N; (iii) the cognate object constructions; in spoken language, (iv) the noun phrases where some constituents are omitted; (v) the repetitive noun phrases. Finally, all of the instances in question are systematically explained on the basis of the correlation between some principles of event construals (the principles of iconicity and the figure-background combinations) and the frequencies of the instances.

研究分野：意味論

キーワード：形容詞 限定用法 事象 名詞句 同族目的語構文

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

英語の名詞句[Adj-N]に見られる修飾関係に関して、Bolinger (1967)が、内在的、外在的修飾関係に基づく分析を展開している。また、Pustejovsky (1995)は、生成語彙論の枠組みにおいて、特質構造を仮定し、名詞の意味構造を細分化することで、形容詞の修飾関係を考察している。さらに、Langacker は、認知意味論の枠組みにおいて、名詞句[Adj-N]をスキーマとして捉えることで、名詞句内の修飾関係の多様性を明らかにしようとしている。

当該名詞句の記述の一般化に関して、Huddleston and Pullum (2002)と Quirk et. al (1985)が、形容詞、名詞のそれぞれの語彙的意味的特徴に基づき、各名詞句の事例に見られる意味的特徴を記述している。また、Quirk et. al (1985)や小西 (2001)、安藤 (2005)は、疑似部分詞を伴う名詞句 (a cup/glass of N) における、形容詞と a cup/glass ないしは、形容詞と of 以下の名詞との間にそれぞれ見られる意味的特徴に注目している。さらに、Leech et. al (2009)は、コーパス (Brown, Frown, LOB, F-LOB) を用いて、アメリカ英語、イギリス英語の名詞句内に見られる修飾関係の多様性に関して、1960年代と1990年代の言語使用を比較することにより、通時的説明を試みている。

しかし、先行研究には問題が残されている。それは、当該名詞句に見られる多様な修飾関係が、体系的に説明されていないという点である。理論的一般化における定式化は、一定程度成功していると言えるが、説明できる経験的事実が、基本的な用法と、一部の周辺的事例にとどまっている。そのため、名詞句[Adj-N]全般にわたる、体系的説明がなされていない。

また、経験的事実の観察に基づいて、個々の記述的説明はなされているが、事例間の意味関係が十分に検証されていない。その結果、先行研究では、[Adj-N]から構成される名詞句に関して、理論的説明と、記述的説明がそれぞれ別個にあり、相互に関連づけられておらず、実際の言語使用が反映された記述の一般化であるとも、人間の事態認知が十分に反映された定式化であるとも言い難い状況にある。

2015年度までの科研費による研究(「英語における形容詞、名詞から構成される名詞句の修飾関係と、その意味拡張について」)では、名詞句に見られる多様な修飾関係は、文法原則「形容詞が統語配列上も、意味的にも後続する名詞を修飾する」に従っていること、形容詞が名詞によって表される実体の性質を表す典型的な事例から、事象や動作の様態を表す周辺の事例に至るまで、意味的連続性と意味拡張がそれぞれ見られることを明らかにしてきている。

2. 研究の目的

英語における名詞句[Adj-N]は、形容詞が、後続する名詞を修飾するという文法形式を構成しながら、意味的には、様々な対象と修飾関係を構築する。本研究は、英語の名詞句[Adj-N]に見られる事象修飾を考察対象とし、事象修飾の各事例に見られる形式と意味との対応関係に見られる規則性を解明することを目的とする。とりわけ、当該名詞句の修飾関係は、事態認知の把握の仕方と、各事例の頻度の相互作用によって、体系的に説明されることを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、名詞句[Adj-N]から構成される事例のうち、形容詞がメトニミー的に事象修飾する、次の3つの事例を考察対象とする。

- (1) 形容詞が、実体を表す名詞と修飾関係を結び、メトニミー的に事象修飾する事例
(例) a quick/morning coffee a quick/slow beer
- (2) 形容詞が、疑似部分詞 + 名詞(句)と修飾関係を結び、メトニミー的に事象修飾する事例
(例) a second/last cup of coffee a second/last glass of beer a hot cup of coffee
- (3) 形容詞が、事象名詞と修飾関係を結び、メトニミー的に事象の動作、参加者を修飾する事例
(例) live a good/normal life lead a normal/different life

また、次の2つの方法を用いて、これら3つの各事例の意味的特徴を明らかにし、形式と意味との対応関係を考察する。

- (1) コーパスの活用により、経験的事実の収集と観察、新たな言語事実の発掘を行う。名詞句[A-N]によって表される事象修飾の意味的特徴を明らかにし、各事例の頻度を年代毎に検証し、その修飾の仕方の変遷を明らかにする。
- (2) 名詞句[A-N]の各事例において、事象修飾パターンの意味的連続性を検証し、形式と意味との対応関係に見られる規則性を明らかにし、一般原理からの説明を試みる。

4. 研究成果

(1) 形容詞が、「実体を表す名詞と修飾関係を結び、メトニミー的に事象修飾する事例」と、「疑似部分詞 + 名詞(句)と修飾関係を結び、メトニミー的に事象修飾する事例」との対照研究を行った。具体的には、The Corpus of American English (COHA)を用いて、形容詞が a beer, a coffee を修飾する事例と、形容詞が a {glass/bottle/can} of beer, a cup of coffee を修飾する事例の意味的特徴をそれぞれ考察した。その結果、名詞毎に修飾関係の分布に違いが見られることが明らかとなった。beer の場合、形容詞が名詞句 a beer との間で事象修飾の関係を構築し、動作の様態を表す形容詞の事例が多く(a {quick/slow} beer)、動詞 enjoy の目的語位置に生起できるという特徴が見ら

れた。一方、名詞句 a {glass/bottle/can} of beer の場合、動作の順序を表す形容詞 second や last が生起することで、事象修飾の事例が見られるが、形容詞 cold や fresh が a beer を修飾することで、ビールの状態を表す傾向が強く見られることが明らかとなった。

また、coffee に関して、名詞句 a cup of coffee の場合に事象修飾の関係が強く見られることが明らかとなった。具体的には、形容詞が、飲み物の評価を表す事例 (a {delicious/good/ decent} cup of coffee) や、動作の様態を表す事例 (a {hasty/quick/third} cup of coffee)、出来事全体の様態を表す事例 (a {comfortable/convivial/thoughtful/midmorning} cup of coffee) が多く見られる。また、形容詞 hot, fresh が、名詞句 a cup of coffee を修飾することで、コーヒーの状態を表す事例 (a {hot/fresh} cup of coffee) も多く見られる。一方、形容詞が、名詞句 a coffee を修飾する場合、コーヒーの品質や評価を表す形容詞 delicious や great が生起する事例 (a {delicious/great} coffee) が多く見られる。また、メトニミー的に事象修飾する事例として、COHA では 1984 年に a {quick/morning} coffee を確認でき、1990 年代、2000 年代と時間が経過するにつれて、事象修飾の事例が次第に見られるようになる。同様の傾向は、The Corpus of American English (COCA) においても確認できる。このことから、名詞句 a cup of coffee の事象修飾に比べ、名詞句 a coffee に見られる事象修飾の事例は、確立の途上にあることが明らかとなった。

(2) 形容詞が、「疑似部分詞 + 名詞 (句) を事象修飾する事例」として、形容詞が、名詞句 a cup of N を修飾する際、2 つの修飾可能性 (i) a cup を修飾する事例と、(ii) 飲み物を表す名詞 N を修飾する事例それぞれに見られる、意味的特徴を考察した。その結果、形容詞が、a cup を修飾する場合、飲み物の状態や、動作、事象の様態を表し、動作との関わりの中での飲み物の在り方を特徴づける。一方、形容詞が N を修飾する場合、形容詞は、飲み物の種類や状態を表し、当該名詞句全体は、飲み物の量を特徴づけることが明らかとなった。つまり、形容詞が、a cup を修飾する場合、「飲み物の在り方」が「図」として捉えられ、「飲み物の量」は「地」として捉えられる。一方、形容詞が、飲み物を表す名詞 N を修飾する場合、当該名詞句全体では、「飲み物の量」が「図」として捉えられ、「飲み物の在り方」は「地」として捉えられる。この「図」と「地」の反転は、各名詞句と共に起る動詞の分布の違いから確認できる。また、いずれの修飾関係も、類像性の原理のうち、近接性 (proximity) によって動機づけられていると説明した。

この分析に基づいて、形容詞 hot が名詞句 a cup of N との間に見られる、2 種類の修飾可能性に関して、各名詞句に見られる意味的特徴を考察した。その結果、a cup of hot N の事例は、1 杯の熱い飲み物の「量」が強調される場合に用いられるのに対して、a hot cup of N の事例は、1 杯の熱い飲み物の「熱さ」が強調される場合に用いられる点で違いが見られることを明らかにした。また、名詞句 a hot cup of N の形成過程を通時的に考察した。その結果、a cup of hot N によって表されていた事例が、時間の経過とともに、形式と意味の「ずれ」が見られる a hot cup of N として文法化される、通時的発達が見られる事例であることを明らかにした。さらに、a cup of hot N の事例であっても、1 杯の「量」と同様、「熱さ」を強調する経験的事実が存在することを指摘し、その理由に関して、a hot cup of N の事例が通時的発達の途上にあるため、それを補完するために残存していると説明した。

また、名詞句 a hot cup of N の事例の場合、N に生起する飲み物を表す名詞の中でも、coffee と tea が多く見られるのに対し、chocolate は、ほとんど見られない。この分布の違いの説明を試みた。その結果、coffee と tea の場合、時代とともに、当該の飲み物の選択肢の種類増加に伴い、とりわけ、冷たい種類の飲み物が選択肢にある場合、それと区別するために、a hot cup of N が使われるようになったと説明した。一方、chocolate の場合、hot chocolate と区別される他の選択肢が無いので、a cup of hot chocolate によってのみ表されると説明した。

(3) 形容詞が、「事象名詞を修飾する事例」として、同族目的語構文 live a/an Adj life と、当該の構文と同義関係にある動詞句 lead a/an Adj life の形成過程の違いを、各動詞句に生起する形容詞の分布の通時的推移を検証することで考察した。

その中で、それぞれの動詞句に生起する形容詞の初出年を検証することにより、当該の形容詞が、DIFFERENCE と ONE, WANDER, MANNER, GOOD, BAD のいずれかのカテゴリーに分類されることを示した。また、これらの形容詞の分布が互いに影響を与え、重なりと広がりを見せながら、各動詞句が形成されていることを明らかにした。さらに、live a/an Adj life と lead a/an Adj life、それぞれに生起する形容詞の分布は、「他の生活との対比、他者から離れた生活状況を端的に表す形容詞」(new, different, single など) から、「世俗から離れた人生、生活の過程を表す形容詞」(regular, quiet, common など) 「話者、主語の価値判断に基づく生活状況を表す形容詞」(good, merry, bad, hard など) に至るまで、3 段階に分かれて意味的推移が見られることを明らかにした。これは、文法化の過程に見られる「主観化」が、この意味的推移に見られることを示唆している。

また、初出年の時間的先行関係にかかわらず、時間の経過とともに、live a/an Adj life に生起し易い形容詞のカテゴリー (GOOD) と、lead a/an Adj life に生起し易い形容詞のカテゴリー (WANDER と BAD) が存在することを明らかにした。また、MANNER に分類される形容詞は、live a/an Adj life には生活全般を表す形容詞 (normal, full) や、平穏な生活状況を表す形容詞 (quiet, healthy, peaceful, common) が生起し易いのに対して、lead a/an Adj life には、具体的な生活の特徴を表す形容詞 (busy, sedentary) が生起し易いことを指摘した。

動詞句毎に生起し易い形容詞の違いが見られることは、各動詞句の形成過程の違いに起因す

ると指摘し、その上で、各動詞句の形成過程を Goldberg (1995)による融合 (amalgamate) を用いて説明した。具体的には、live a/an Adj life は、自動詞構文 (live 'live in a particular way') と、他動詞構文 (pass 'pass time or pass your life in a particular way') の2つの構文の融合の結果、形成された構文であり、lead a/an Adj life は、lead の二重目的語構文の意味の一部と、「他の状態との比較、対比が含意され、ある特定の分野で、成功を収める状態を表す」という lead の語彙の意味が融合されて形成されると説明した。これら動詞句の形成過程の違いに伴い、live a/an Adj life によって表される事象は、通常の生活、これまでの生活との対比の中で、形容詞によって生活が包括的に特徴づけられる。そして、後続する句や文によって、その具体的な生活が詳述される場合に用いられる。一方、lead a/an Adj life によって表される事象は、他の事象との対比により、因果関係ないし対比関係が構築されることで、形容詞によって表される生活を経験する状況を表す場合に用いられることを明らかにした。

(4) 英語の話し言葉における、名詞句内の構成要素に省略が見られる現象に関して、形容詞が、「疑似部分詞 + 名詞 (句) を修飾する事例」に注目し、省略が見られる名詞句の意味的特徴と談話的特徴について考察した。先行研究では、a cup of coffee, a glass of beer に代表される、疑似部分詞 + 飲み物を表す名詞 (N) から構成される名詞句との関連で、飲み物を表す不可算名詞 coffee, beer が、a coffee, a beer のような可算名詞に転換されることが指摘されている。本研究では、名詞句内の構成要素の省略が見られる名詞句は、可算名詞への転換の過程の一部として捉え、分析を進めた。

英語の話し言葉において、構成要素が省略される部分の違いによって、2通りの可算名詞句が具現化される。それは、名詞句 a cup of coffee の場合、of coffee が省略されて名詞句 a hot cup のように表される事例と、cup of が省略されて名詞句 a delicious coffee によって表される事例である。また、この構成要素の省略は、飲み物の状態だけでなく、a really quick beer のように、事象修飾する名詞句にも見られる。

本研究では、The Corpus of American Soap Operas (SOAP)に見られる、名詞句 a/an (Adj) cup of N と、名詞句 a/an (Adj) glass of N の構成要素の一部が省略される名詞句を考察対象とし、名詞句 a/an (Adj) cup/glass と、名詞句 a/an (Adj) N にそれぞれ見られる、意味的特徴と談話的特徴を検証した。その結果、省略が見られる名詞句の意味的特徴として、構成要素の省略は、談話内で、「飲み物の量」が話題の中心とされるか、「飲み物の性質」が話題の中心とされるかによって「図」と「地」が反転する関係にあることを明らかにした。名詞句 a/an (Adj) cup/glass は、「飲み物の量」が「図」として、「飲み物の性質」が「地」として、それぞれ捉えられる。一方、名詞句 a/an (Adj) N は、「飲み物の性質」が「図」として、「飲み物の量」が「地」として、それぞれ捉えられることで、使い分けられる。

また、2つの当該名詞句が生起する談話構造を検証することで、構成要素の一部が省略された名詞句が用いられるメカニズムを解明した。とりわけ、構成要素の省略は、談話内で Landmark (LM) と Trajector (TR) の関係が成立する場合に見られることを明らかにした。話し手と聞き手との間で、飲み物に関する情報が共有され、その共有された情報の中で、情報の手がかり (基準) となる情報が、談話内で先行し、それが LM として機能する。この LM を手がかりとして、話題の中心となる情報である TR の役割を果たす場合に、名詞句 a/an (Adj) cup of N 内で構成要素の一部が省略された、2つの名詞句のうち、いずれかが用いられることを明らかにした。

また、名詞句内の構成要素の省略の長さは、類像性の原理 (量の原理 (quantity principle)) によって動機付けられており、本研究で扱った2つの名詞句は、「飲み物の量」と「飲み物の性質の詳述」という情報を表す際に用いられる。それに伴い、構成している言語要素も、省略されて、より少ない構成要素から成る a/an (Adj) cup/glass, a/an (A) N という文法形式を用いてそれぞれ表されると説明した。

(5) 英語の話し言葉において、名詞句の反復が見られる現象がある。その中で、本研究では、「事象名詞を修飾する事例」である、形容詞が名詞 life を修飾する名詞句において、反復が見られる名詞句の意味的特徴および談話的特徴を考察した。

その結果、反復が見られる名詞句内の中で、第1要素の名詞句と、反復される第2要素の名詞句には、それぞれ意味的分業が見られることを明らかにした。[N, A-N] の事例では、第1要素が、a life 「生活、または、人生」を提示し、第2要素は、その第1要素によって表される a life の生活状態や、人生の在り方を具体化する役割を担う。また、[A-N, A-N] の事例では、第1要素に生起する、形容詞に内在的に指定される境界性 (boundedness (Paradis (2001))) の種類が、第2要素の形容詞の分布と、当該名詞句全体によって表される詳述性を決定する、重要な役割を担うことを明らかにした。とりわけ、第1要素には、形容詞 good のように、形容詞によって表されるスケールが想定され、状態の程度を表す形容詞が生起し易い。また、第2要素との意味的關係によって、生活の状態や、人生の在り方を詳述する事例と、程度の状態の高さを詳述する事例の2つに下位分類されることを明らかにした。

最も多くの構成要素から成る名詞句 [a/an Adj-life, a/an Adj life] が、詳述性が最も高く、生活状態や人生の在り方を最も詳細に具現化する。次いで、名詞句 [a life, a/an Adj life] が生活や人生の状態を詳述する。これらの意味的特徴は、類像性のうち、「量の原理」によって動機付けられると説明した。

(6) 4年間にわたる本研究では、英語の形容詞、名詞から構成される名詞句に関して、形容詞と事象(および事象の参与者)との間に構築されるメトニミ的修飾関係のメカニズムの解明を試みた。その結果、事象修飾の事例は、文レベルで成立する事象修飾と、談話的要素を補完することにより成立する事象修飾の2つに下位分類される現象であることを明らかにした。とりわけ、研究対象の範囲を、英語の話し言葉において、構成要素の一部に省略や反復が見られる名詞句へと拡大させて分析を行うことができた。この分析により、従来の研究で行われてきた、名詞句を構成する要素の語彙的意味の合成性の視点からだけでなく、認知言語学の知見と、談話的視点を融合させて事象修飾の考察を行うことで、従来の記述的説明の精緻化を図ることが可能となった。

また、いずれの事例においても、当該名詞句内の形式と意味との対応関係は、一貫して類像性の原理(近接性と量の原理)と、「図」と「地」の組み合わせ、各事例の頻度によって動機付けられていることを明らかにした。これにより、形容詞、名詞から構成される名詞句に見られる事象修飾は、英語の形容詞の限定用法の文法規則に従いながら、私たち人間の事態認知の在り方が反映されている言語現象であることが明らかとなった。

さらに、本研究は、当該名詞句に見られる事象修飾の形成過程を考察するために、通時的視点から分析を行った。これにより、当該名詞句の形成過程を明らかにするだけでなく、慣習的な使用によって、従来の文法形式から逸脱する事例や、新たな表現形式による事例の創出および変異形の使用など、当該名詞句内で経時的変化が見られることを明らかにした。今後、事象修飾として考察する研究対象の範囲の拡大と、英語の事象修飾が見られる名詞句の変容の過程のさらなる精緻化が期待される。

本研究で得られた研究成果は、実際の言語使用に基づく記述的一般化を実現し、これまでの言語理論で主張されてきた定式化に基づいて説明されている。この点において、語彙意味論と、認知言語学、構文文法で得られた知見と、コーパス言語学の知見を融合した研究として位置づけられる。これは、Perek (2015)による研究手法と軌を一にするものであり、各言語理論において展開されてきた言語研究の精緻化と、理論の進展に寄与する研究と言える。

最後に今後の研究課題について述べる。本研究で得られた知見に基づき、事象修飾を表す文法形式として、動詞+副詞ではなく、形容詞+名詞から構成される名詞句が用いられる理由を今後さらに精査する必要がある。また、従来の文法規則では説明できない、新たに創出されている a morning coffee や、a free coffee、a grande cappuccino などの名詞句に見られる形成過程と、各事例がどの程度まで慣習化が進み、慣習化された表現として定着されているかに関して、共時的視点と通時的視点から考察し、他の事例との関係を体系的に説明する必要がある。さらに、今回の研究では、事象修飾が見られる名詞句の形成過程と、頻度効果との相関性を十分に検証できなかった部分があるので、今後、この点をさらに考察しなければならない。

なお、当該研究期間内に得られた研究成果の一部は、研究発表2件と、シンポジウムでの発表2件、招待講演2件、論文6編(うち proceedings 2編)において発表されている。また、次年度以降、本研究で得られた研究成果の一部を著書として出版する予定があり、準備を進めている。

<引用文献>

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』, 開拓社, 東京.
- Boliner, Dwight (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication," *Lingua* 18, 1-34.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago University Press, Chicago.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 小西友七 (2001) 『英語基本名詞辞典』, 研究社, 東京.
- Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair, and Nicholas Smith (2009) *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Paradis, Carita (2001) "Adjectives and Boundedness," *Cognitive Linguistics* 12, 47-64.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehension of the English Language*, Longman, London.
- Perek, Florent (2015) *Argument Structure in Usage-Based Construction Grammar*, John Benjamins, Amsterdam.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金澤俊吾	4. 巻 90
2. 論文標題 「英語の名詞句内に見られる省略について」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本英文学会第90回大会Proceedings』	6. 最初と最後の頁 93-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤俊吾	4. 巻 36
2. 論文標題 「英語における名詞句の反復に見られる意味的特徴について」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『JELS 36（日本英語学会第36回大会研究発表論文集）』	6. 最初と最後の頁 223-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤俊吾	4. 巻 6
2. 論文標題 「英語の名詞cof feeelに見られる文法的特徴と意味的特徴について」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『高知県立大学文化論叢』	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤俊吾	4. 巻 -
2. 論文標題 「英語の形容詞hotに見られる2種類の修飾可能性について」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小川芳樹（編）『コーパスから分かる言語変化・変異と言語理論2』，開拓社.	6. 最初と最後の頁 184-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤俊吾	4. 巻 26
2. 論文標題 「英語におけるlive a/an Adj lifeとlead a/an Adj lifeに 見られる意味的違いについて」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『英語コーパス研究』	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shungo Kanazawa	4. 巻 96
2. 論文標題 "Florent Perek, Argument Structure in Usage-Based Construction Grammar Amsterdam: John Benjamins, 2015. x + 243 pp."	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『英文學研究 (Studies in English Literature)』	6. 最初と最後の頁 148-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 金澤俊吾
2. 発表標題 「英語における不可算名詞、可算名詞の文法化とその意味的特徴について」
3. 学会等名 日本言語学会第153回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 金澤俊吾
2. 発表標題 「英語における同族目的語構文の形成過程とその推移について live a/an Adj lifeとlead a/an Adj lifeを中心に 」
3. 学会等名 東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」主催 第4回ワークショップ「コーパス・多人数質問調査からわかる言語変化・変異と現代言語理論」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金澤俊吾
2. 発表標題 「英語の名詞句内に見られる省略について」
3. 学会等名 日本英文学会第90回大会シンポジウム第十一部門「話し手・聞き手と言語表現 語用論と文法の接点 」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金澤俊吾
2. 発表標題 「英語における名詞句の反復に見られる意味的特徴について」
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会シンポジウム「名詞句をめぐる拡張の諸相」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金澤俊吾
2. 発表標題 「コーパスから見えてくる英語表現の豊かさと規則性について - 英語における名詞句を中心に - 」
3. 学会等名 東北学院大学 英語英文学研究所学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金澤俊吾
2. 発表標題 「英語の事象修飾に見られる、形容詞の意味的特徴と修飾のメカニズムについて」
3. 学会等名 立命館大学 学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----